

研究ノート

ゴスロリが持ち得る臨床心理学的可能性

徳山 朋恵

1、問題と目的

服飾は、それ自体に多くのメッセージが含まれている。臨床心理の分野においても服装は、ただ単に裸では外出できない為に着ているモノというよりも、着ている人のその日の調子や“いつものこの人”を推し量るひとつの手がかりとして当たり前のように、自然に採用される。しかし時に服飾は、秋田がその論文「奇妙な身なりのクライアントたち—Disfigured Hero 臨床編」(2001)において述べているように、個人の在り様やその心理状態を、服装という着る者と見る者がどちらも視認可能な層において留め表す“場”として働く可能性もあるのではないだろうか。

現代における“奇妙な身なり”と呼べるであろう服飾の一つに、ゴスロリがある。ゴスロリはゴシック&ロリータという服装の名前の短縮形でもあり、ロリータ、ゴシック、ゴシック&ロリータやその周辺文化をも含む名称としても使用される。ゴスロリという服装は現実のどの場面にもそぐわない格好であると同時に、その着用者からは「戦闘服」であり、「守り」であるといったような表現も聞かれる事のある服装である。これらの言葉からは、ゴスロリがその個人の在り様を少なからず表現しているのではないかと考えられる。本論文では服飾という物を着用する者に寄り添って眺めた時に、着用者にとってどのようなものであり得るのか、着用

者と服飾の間ではどのようなことが起こる可能性があるのかを考えるため、まずはゴスロリという服飾を取り上げて考察してみたい。

ゴスロリはその発生から数えて少なくとも20年余りが経過しており、その間日本を始め諸外国においても様々な切り口からこの服飾を中心としたサブカルチャーに対する研究がなされている。しかしまえば(2008)も述べているように、ゴスロリの世界観自体を扱うものから現代日本文化、社会学や経済学、ジェンダー、臨床心理学、女性学、服飾、その他分類が難しいものまで分野が多岐に渡り、単発的な論文が多い事に加え、卒業論文や修士論文等、研究はなされているが一般に刊行されていないものも少なくはないと思われる。またゴスロリ自体、今もなお年々変化が見られる性質のものであるため研究の成果が蓄積し難く、ゴスロリの定義や範囲、意味づけなどが曖昧なままに研究を進めざるを得ない事も多い。このように、日本におけるゴシック、ロリータ、ゴシック&ロリータ及びゴスロリ研究は、まえば(2008)の指摘する通りまとまりに欠けている状態だと言える。

ゴスロリを扱った論文においては、ゴスロリとは何なのか、着用者はどのような感覚を得ているのか、なぜゴスロリを着るのかと言う問いに対しての多くの記述や考察が見られる。しかし、ゴスロリを着て得られる感情や感覚が一体何故生起するのか、ゴスロリというものがどの

ような構造のもので、どういった要因がどのように着用者に作用しているのかという問いに対しては、研究者同士、統一したモデルが提示されているとは言い難い。

さらに、臨床心理学的観点からゴスロリを論じた研究の数も非常に少ない。そのため着用者に起きている現象、感覚等がゴスロリでのみ言える特異な現象であるのか、他の“奇妙な”、あるいは普通の服装にも一般的に当てはまる事であるのか、服装以外の形を取った場合はどうかといった臨床心理学的視点からの様々な比較、考察がし難い状況となっている。

故に本論では、まずゴスロリに対する本論なりの定義を述べた上で、服飾に対するこれまでの心理学からの理解、更にゴスロリに対する臨床心理学からの理解をまとめることで、ゴスロリの服飾を着るということがどのようなことであるかに関しての仮説モデルを設定。実際に着用者に対して調査を行う事でその「ゴスロリ着用モデル」を深め、臨床心理学的な観点から他の服飾及び服飾以外の形とも比較が可能となることを目指す。その上で、本論が単発的なものではなく、これまでなされてきた様々なゴスロリに対する研究とも可能な限り繋がる様配慮しながら論ずる。

2、定義

2-1 ゴスロリの表記に関して

本論文ではまえがわ(2008)に習い、ゴシック、ロリータ、ゴシック&ロリータを総称してゴスロリと表記している。また、ロリータファッションを着る少女を主人公とした小説を数多く発表し、ロリータファッション界において影響力の強い作家である嶽本野ばらが、その作品において“ロリータとゴシック&ロリータは似て非なるものだわ”(嶽本, 2001)と主人公に

言わせている事、そしてゴシック&ロリータの成立の歴史などを鑑み、ゴシック&ロリータをゴシック、ロリータとから独立したひとつのジャンルとして捉え、記述する。

2-2 ゴシック

ゴシックとはファッション、音楽、小説、美術、建築におけるひとつのジャンルを指す。元々は建築様式を指す言葉ではあるが、後にそのゴシック建築が廃墟化し、その廃墟を目にしたH.Walpole(ホレス・ウォルポール)が廃墟やゴシック建築の欠片を持ち帰りそれらをコラージュして作った城や、そこから生まれた小説から始まるイメージが現在のゴシックの中核である。つまり、ゴシック小説以前のゴシックの意味を切り捨て、イメージのみをコラージュしたものがそれ以降受け継がれて行くゴシックとなるのだ。ゴシックのイメージとしては、闇、死、苦痛、神秘、耽美、崇高さ、反社会的、逸脱、異端、退廃、恐怖、時間の積み重なりなどが挙げられる。これらは『吸血鬼ドラキュラ』『フランケンシュタイン』などに代表されるゴシック文学から音楽、映画、服装などのサブカルチャーによって日本に伝播している。

日本におけるゴシックは、ゴシックがたどってきた歴史や海外のゴシックが帯びていた宗教性等から今一度切り離され、イメージとしてヴィジュアル系に取り入れられたりロリータと融合するなど他国には見られない独自の発展を遂げている。日本のゴシックファッションは、黒や白を基調とした衣服を身に纏い、中世ヨーロッパの貴族やヴァンパイア、魔女など懐古的、超越的な印象を与えるもので、それを表現するためにベルベットなどの重さのある素材や皮、ラバー、アクセサリなどが使用され、布を破く、ほつれさせるなどのダメージ表現も多く用いられている。この様な、暗黒の世界観や一般社会

からの逸脱、超越したものへの嗜好が日本におけるゴシックだと考えられる。

2-3 ロリータ

ロリータはファッションのジャンルである。その名称はウラジミール・ナボコフの小説『ロリータ』に由来するとされているが、小説とファッションには少女という意味合い以上の直接的な関係は無い。ロリータという単語にまとわりつくロリータ・コンプレックス、ペドフィリアなどのマイナスであり性的でもある意味合いを嫌い、「ロリキタ」「ロリィタ」と表記される事もある。ロリータは、少女趣味、お姫様、ロココ調等のイメージに当てはまるようなスタイルをし、そのイメージに当てはまるような色合い、素材、小物、形、行動を過剰に重ねる事で表現される。現在のロリータのルーツと呼ばれるような服飾は1980年代には既に見られているが、1990年代にロリータファッションと表記されるようになり、2000年代に入り『下妻物語』が映画化されるとその服装と名前が広く一般にも知られるようになった。現在は日本の文化として海外にも広まり、多くの愛好者が存在する。

現在のロリータはそのテイストや色合い、他ジャンルとの融合により分類の細分化が進んでいるものの、その基本的な形は少女性や幼さを前面に押し出した、ロリータにおける西洋のお姫様や王子様をイメージさせる表現を過剰に重ねる服装という点で一致している。水野はこの西洋イメージに対し、マンガやアニメ、特に魔法少女ものにおいて西洋への憧れが表現され続けてきた事、ゴスロリにおける西洋は実際の西洋を忠実に模倣しようとしていない事を挙げ、ゴスロリにおける西洋は日本から見た憧れの世界、夢の世界だと述べ、ゴスロリを着る事はそれを自分の身にまとう事だと述べている(水野、

2009)。また作家の嶽本は、ロリータは個人が自らの美意識、ルール、絶対的価値観に則ってロリータを定義していると述べ、「お洋服を有していなくとも、ロリータな精神さえ持っていれば、君は立派なロリータ」としている(嶽本, 2002)。これらを合わせて考えると、ロリータとは各々がそれぞれの内にある可愛さや少女性に通じる夢や理想、(現実ではない)憧れの世界を持っており、着装行為の有無にこだわらずそれを自らのものとして意識し、肯定する事である。つまりロリータは特徴のある外見をしそこに拘りを持ちながらも、重要なのはその服ではなく精神なのであるとも言え、したがって女性だけではなく男性のロリータも肯定され得るものである。

加えてロリータを論ずるにあたり重要な視点として世代性を挙げておきたい。ロリータ服ブランドの元デザイナーである加藤は、ロリータファッションを世代別に区分している(加藤, 2010)。第一世代が80年代のDCブームの頃、第二世代が90年代のブランド信奉が崩れた時代、第三世代が2000年代後半の下妻物語が公開されて以降である。加藤はこの区分について、第一世代と第二世代での大きな差はコミュニケーションの取り方であり、同じロリータ同士でも敵対心を持つ第一世代に比べ、第二世代は音楽、アニメなどに興味を持ち、お茶会やライブなどで相互に交流するようになる。また第二世代と第三世代ではその価値観に差があり、他の人と一線を置きたい第二世代に比べて第三世代は他の人と違う事を恐れる傾向があると述べている。

2-4 ゴシック & ロリータ

ゴシック & ロリータとは、ロリータにゴシックが混ざったものであり、ゴシックにロリータが混ざったものでもある。形はロリータと同様

であるが、どこかに闇などのゴシック的な要素が入っていかなくてはならない。80年代には既に現在のゴシック & ロリータと似たような服装が関西を始めとするストリートでは見られておりゴシック & ロリータのようなデザインの服を売るブランドが立ち上げられていたが、大きな役割を果たしたのはヴィジュアル系バンドである。その中でも MALICE MIZER のギターリスト、Mana は自らゴシック & ロリータ様の服装を身に纏いその服装を Elegant Gothic Lolita (エレガント・ゴシック・ロリータ) と呼んだ。それによりゴシック & ロリータという名前はその服装やイメージと強く結びつくこととなったとされている。やがて2000年代になるとゴスロリの名前が冠される専門雑誌も登場した事に加え、2003年に大阪府河内長野市においてゴスロリを着用する少年少女による殺傷事件が起きたことによっても一般に広く知られるようになった。

着用者によってロリータとゴシックの配分や捉え方の違いは見られるが、ゴシックの暗黒さや社会から逸脱したものを嗜好する感覚と、ロ

リータの少女性や西洋への憧れを意識し肯定する意志は、ゴシック & ロリータに共通して見られるものであると言えよう。

3、心理学的観点からみた服飾、およびゴスロリについて

では、そのようなゴスロリは、心理学の分野からはどのような視点から理解されるのだろうか。ゴスロリを被服、服飾ととらえた上での視点、及びゴスロリと明記されている視点に分けて記述する。

3-1 心理学的観点と服飾一般

服を着る、つまり着装行動における関わりは、着用者自身との関わり、他者との関わり、集団との関わり、社会・文化との関わりと、様々なレベルでの関わりがある。ここでは個人と服飾を中心に置いて概略的に述べられている概念をまとめたい。

まず、着用者がどのような欲求を持って服飾を着用するかに関しては、Maslow の欲求の分

表1 欲求の分類と着装行動 (小林,2003を改変)

生理的欲求	生理学的機能に不可欠な生理的欲求 ＜寒さをしのぐこと＞
安全の欲求	恐怖、苦痛、不快を逃れたいという欲求であり、安全・安定の欲求ともいう ＜害虫から身を守る、外傷から身を守ること＞
所属と親和の欲求	帰属、需要、愛情に対する欲求であり、社会帰属の欲求ともいう ＜仲間集団に入って親しくなるために人並みの衣服を着るというエチケット的な働き＞
尊敬と承認の欲求	威信、著名、承認と関係した欲求であり、自我の欲求ともいう ＜流行の衣服、人よりも良い衣服を着て人から認められ、賞賛されたいという優越感(自尊心)の満足＞
自己実現の欲求	自己表現、行動への活力、自己達成と関係した欲求である ＜流行の中にも個性を生かした衣服を着用したり、手作りの衣服を着用するなど自己表現の意味合いが強くなる＞
知識への欲求	好奇心、達成欲、自己感性と関係した欲求
審美的欲求	美、調和、秩序の干渉の欲求

類に即して表1の様に述べられている。

着用する服飾自体は着用者の欲求を含む様々な考えによって規定されているが、反対に着用者自身の気分や感情にも作用する。同時に着用者の服装は他者によって観察され、着用者と他者との相互作用に影響することも多い。これら、着用者から服飾、服飾から着用者、服飾を着用した着用者と他者との関係という三つの関係性は、図1のように表す事ができる。

図1の中でも着用者から服飾に対して持つ関係、つまり着用者はどのような服飾を選んでいるかであるが、その決定には主に着用者の自己概念と身体像が影響するとされている。ここで述べる自己概念には、自分の能力、性格等どのように理解し、認識し、評価しているか、集団や社会とどう関わるかといった意識が含まれ、現在の自分自身に対する自己概念である現

实的自己概念と、こうなりたい、こうありたい、といった理想の自己概念である理想的自己概念に分かれる。藤原(1987)の研究によれば、好きな服飾は、現実的自己概念と、現実的自己に対してより個性的であり一般的に望ましいとされている理想的自己概念の間に位置し、嫌いな服飾はその逆方向に位置するとされている(図2)。身体像にも同様に、主観的に構成された現実の自分の身体像イメージである現実的身体像と、自分の理想としての身体像である理想的身体像があるとされ、自己概念と同様に、服飾は現実的身体像を理想的身体像に近づけるために用いられる事が多いとされている。

反対に、服装から着用者に対する影響では、感情の変化、姿勢や動き方などの変化が挙げられる。服飾が着用者の感情や気分及び作用については、着装する衣服の種類、着装者の衣服に対する好みや評価、着装場面へのふさわしさなどさまざまな要因が関与するために客観的な測定が困難な分野だとされているが、その色彩や形態などにより主に、温熱生理的レベル、運動生理的レベル、感覚的レベル、心理的レベルでの感覚を生起させるとされている(中川, 2005)。特に服飾心理学においては心理的レベルでの作用に注目した研究が多くなされており、藤原(1996)によって、場面にふさわしく自分が着たい服装では肯定的感情が生まれやすい事、場面にふさわしくなく着たくない服装では否定的感情が生まれやすい事、場面にふさわしくとも自分が着たくない服装であれば恥ずかしく思い、場面にふさわしくない服装であろうと自分が着たいと思う服装の場合には羞恥心はあまり生起しない事等が報告されている。

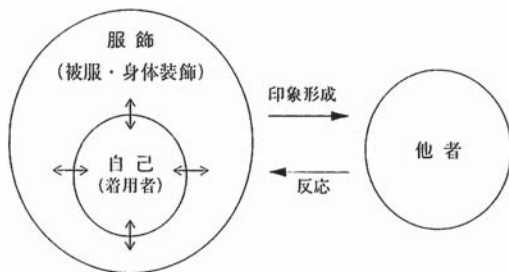


図1 服飾とその着用者、および他者との関わり (藤原,2005)

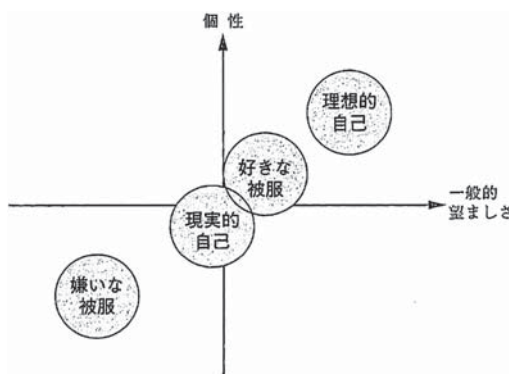


図2 自己概念と好きな被服・嫌いな被服のイメージとの関係 (藤原,2005)

3-2 臨床心理学的観点とゴスロリ

以上、服飾心理学の分野から服飾がどのように理解され、研究されているかをまとめたが、臨床心理学的観点からはゴスロリに対してどのような理解がなされているのだろうか。ゴスロリを扱っている文献の内臨床心理学的視点を用いて述べているもの、及び著者が臨床心理学者、精神科医であるものをまとめる。

まず2003年に起きた河内長野市における殺傷事件に関するものが挙げられる。この事件に関しては論文という形ではないが、八幡(2004)が「死・狂気などの「あちら側」へと異様に傾倒する」者としてゴスロリを描き、香山(2004)が「私は特別だ。ほかの人とは違う」と思う子たちがゴスロリに向かう」として自己愛を満たすという視点から言及している。自己愛とゴスロリ着用の関連性に関しては、高石(2009)も言及を行っている。一方で、西村(2005, 2006, 2009)はゴスロリを着用者の魂の現れと捉え、自身の魂を享受するための服飾として魂の現象学という観点から捉えている。またEndo(2009)は映画『下妻物語』にみられる視線の問題をLacan(ラカン)やDoan, M.A(メアリー・アン・ドーン)らの論を用い、見られる客体であるロリータがいかにして主体としての地位を獲得するかに焦点をあてて論じている。

以上、ゴスロリに対して臨床心理学的観点から言及がなされている文献を未刊行のものを除き手に入るものはほぼ全てまとめたが、本数自体が少なく切り口も様々であり、ゴスロリ着用者を臨床心理学的視点から理解するには量、質ともに未だ不十分であると言えよう。

3-3 ゴスロリ着用モデル

以上の事からゴスロリという服飾は、想像上の中世ヨーロッパ性を基本とする中にも闇や少

女などの様々なイメージを帯びた服飾であり、着用者は服飾に付随するイメージに対し、自分自身の持つ何らかの意思、イメージ、概念、欲求を持って自分なりの服飾の組み合わせとして形にし、自らの身に着用するものではないかと考えられる。以上をひとつのモデルとして図3に示した。ここで強調したいのは、単にゴスロリの服装を組み合わせるだけではゴスロリとは見なされない傾向がある事である。ロリータの定義において述べた様にその精神こそが大切とされ、例え全身をゴスロリで固めていようともゴスロリの形だけを真似ていると見なされれば「コスロリ(ゴスロリのコスプレ)」と批判される対象となり得る。つまりモデルをそのまま真似るのではなく、自らの意思を介在させて選択した服装がゴスロリだという事になる。西村も、服の魂とそれを着こなす人間の魂との相応・融合によって魂としての「私」が現成すると述べており、同じくゴスロリ着用者にも魂としての「私」が服に現成していると述べている(西村, 2003, 2005)。服飾を選択する際に着用者が服飾と互いに作用しあう事で初めて、ゴスロリはゴスロリとなると考えられよう(図3)。以上の仮説モデルを設定した上で、着用者個人にとっての“ゴスロリ”を調査した。

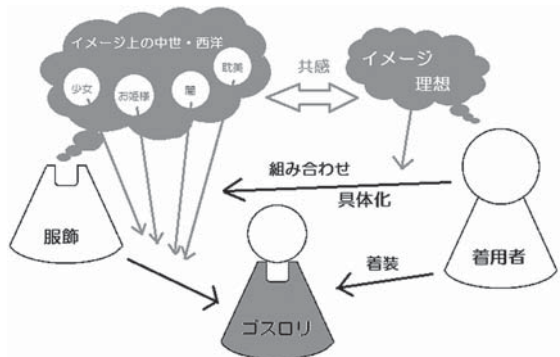


図3 ゴスロリにおける着用者と服飾の関係 (ゴスロリ着用モデル)

4、調査1 着用者へのインタビュー調査

4-1 調査参加者

2009年、所属大学の講義終了後とオンライン SNS 上にて趣旨を説明し、参加者を募った。実際に調査を行ったのは自らをゴスロリと認識する者7名(女性6名、男性1名。ゴシック1名、ロリータ1名、ゴシック&ロリータ3名、全て1名、着ない1名)であるが、その内1名に関しては着用者ではないために本研究からは除外し、6名を対象とした。調査は全て、関西にて行った。

4-2 手続き

最初に筆者の所属、調査目的、連絡先などを明らかにし、大体の所要時間、途中で止められる事を説明した。その上でアンケート用紙への回答を依頼。それを元に1時間程度の半構造化面接を行った。アンケートで尋ねた内容は、①協力者がゴスロリの内どの属性であるか、②そ

れらの服装をよくするか、③いつごろから興味を持ち、いつごろから服装を着、何年続いているか、④イメージするゴスロリとはどのようなものか、の4点である。また面接では、①着用前、②着用時、③着用後、④ゴスロリのイメージに分けて話を聞き、全員にあなたにとってのゴスロリとは何かを尋ねた。面接時の内容は協力者の目の前で書き取り、その後取得したアンケートのデータ、書き取ったデータを合わせ、KJ法で分類した。今回の調査におけるデータは質問紙等で設定された質問項目を元に尋ねているため、得られたデータも質問項目に対する回答が多く見られた。まずはその大まかな構成を見るといふ目的からKJ法を採用した。

4-3 結果

KJ法により生成されたカテゴリーの内、個人とゴスロリの関係を表す大カテゴリー、【ゴスロリ(服飾)について】【着用に至るまで】【着用して得られるもの】【着用者とゴスロリ】を

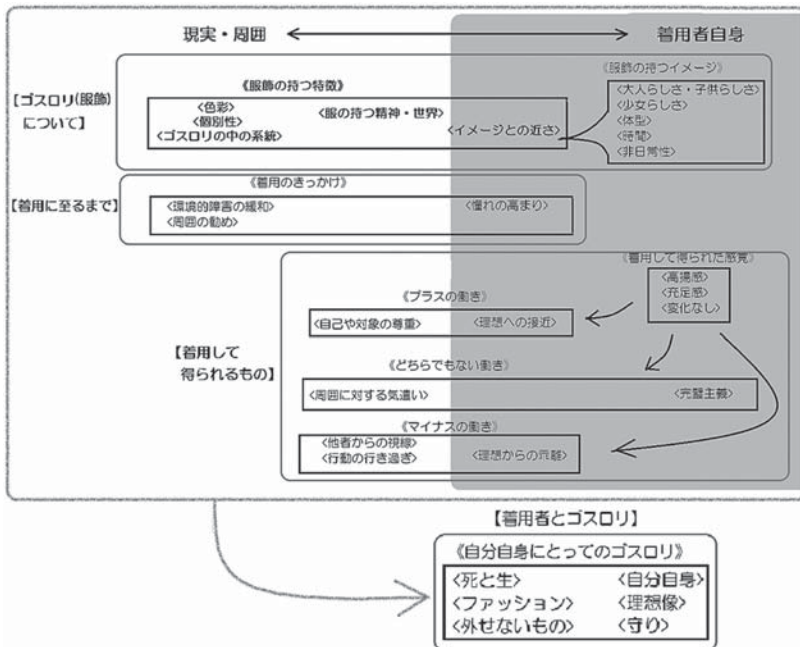


図4 ゴスロリ着用者とゴスロリの関係についてのモデル図

取り上げた。カテゴリー間の関係を表すモデル図として以下に示す（大カテゴリーは【 】中カテゴリーは《 》小カテゴリーは〈 〉で示す）。

4-4 考察

図4に関して簡単にまとめ、考察を加えたい。なお、これらを図示する上で自分自身の内部で起きているであろうカテゴリーから周囲の人々や現実世界を視野に入れたカテゴリーまで幅が見られたため、上部に補助的にベクトルを入れ、それに基づきカテゴリーをプロットした。図1と対応させるならば、上部【ゴスロリ（服飾）について】は着用者による服飾への規定、右側網掛け部分はおおむね、服飾による着用者への作用、そして左側網掛けのない部分は、観察され、相互影響する関係に該当するだろう。

まず【ゴスロリ（服飾）について】語る際には、《服飾の持つ特徴》とカテゴライズされるような、〈色彩〉〈個別性〉〈ゴスロリの中の系統〉〈服の持つ精神・世界〉〈イメージとの近さ〉といった服飾自体に関するものが挙げられる。上記、〈イメージとの近さ〉においてイメージされているものとしては、《服飾の持つイメージ》、つまり〈大人らしさ・子供らしさ〉〈少女っぽさ〉〈体型〉〈時間〉〈非日常性〉といったイメージが語られる。そのような、服飾として表される特徴から着用者が持つ目に見えない身体像までを含んだイメージを総合して、着用者はゴスロリを捉えている事が窺える。

続いて【着用に至るまで】には《着用のきっかけ》として、〈環境的障害の緩和〉〈周囲からの勧め〉〈憧れの高まり〉が挙げられている。着用したいという思いはあつつも、実際に着用するためには環境的障害（主に金銭的理由が挙げられていた）を緩和するなどの、現実的な後押しが必要な様子である。そうして着用したゴ

スロリから【着用して得られるもの】としてはまず、《着用して得られた感覚》が多く語られる。〈高揚感〉〈充足感〉〈変化なし〉のカテゴリーに分かれたが、概ね肯定的な感覚が得られるようである。この点に関しては、藤原(1996)が述べているように、場所に関わりなく着用者の着たい服である、という点が大きく作用しているであろう。〈変化なし〉カテゴリーにおいても、着る前からゴスロリである為服を着ても変わらない、という発言が聞かれており、否定的な意味での〈変化なし〉ではないように思われる。また《着用して得られた感覚》の変化に続き、実際に着用者の行動が変化している様子も語られている。《プラスの動き》として〈自己や対象を尊重〉する動き、〈理想像への接近〉という動きが挙げられる。反対に《マイナスの動き》として挙げられているのは〈他者からの視線〉〈行動の行き過ぎ〉〈理想像からの乖離〉である。また《どちらでもない動き》として〈周囲に対する気遣い〉〈完璧主義〉が挙げられている。

ここまでを総合して考察すると、ゴスロリを着用する際に着用者に起こる事とは、まずは着用者自身を主体として中心に据える事だろう。更に自らに起こる感覚や感情、思考の変化を捉える事を通して、他者を尊重したり、気遣いを見せたり、時には行動が行き過ぎてしまったりと、周囲に対し再度、今度は“ゴスロリ着用者である自分”として視線を向け、働きかけている事がわかる。と同時にそれまでイメージとして保持していた自身の理想像、時には身体像を含んだ像との距離も意識されるようだ。この点に関しては、図2にて述べられている様に、理想とする自己及び身体像と、現実の自己概念及び身体像との間にゴスロリという服飾が位置する事が示唆される。であるがゆえに、理想に近づけた自分、そして理想からはどうしても距

離のある自分が意識されるのであろう。しかし、図2においては“一般的な望ましさ”のより高い位置に理想像が位置するとされている。この位置に<非日常>というイメージを生起させるゴスロリがそのまま当てはまるとは考えにくい。本調査において協力者が述べている「理想像」がどのようなものであるか、そもそも着用者は現実的な自己概念をどう捉えているのか等、ゴスロリ着用者の持つ自己概念に関しては、今後の検討点となるだろう。

着用者は上記の様にゴスロリに対してイメージを持ち、それを何らかのきっかけを経て着用し、そこで様々な体験をする。それら全てが表れているのが、【着用者とゴスロリ】カテゴリーであろう。ここでは《自分自身にとってのゴスロリ》として、<死と生><ファッション><外せないもの><自分自身><生き方><守り>と様々な言葉で表現されており、回答者によってさまざまな捉え方、付き合い方がなされている事が窺えた。

調査対象者の人数が少ない為におおまかな、ある程度の方向付けにしかならないが、以上を総合して考察すると、周囲や現実的な問題を解消する事でそれまで持っていた“着たい”という願望を叶え、ゴスロリを実際に着用する事をきっかけに、自分の感覚や感情等自己の内部へと目を向け始めている事、また自身の好むイメージを身に纏う事で、周囲の場面にはそぐわなくとも心理的な快適さを覚えている事が示唆された。更に服飾として着用し続ける中で、自分の中で持っていたイメージと現実世界における肉体を伴った（体型などを持ち、行動する）自分との間でのやり取りを行っているのではないかと考えられる。しかし【着用者とゴスロリ】カテゴリーで見られるように、そのような作業を含むであろうゴスロリをどういった体験と認識し、語るかにおいては、ファッションの

一部だとする者から自らの死と生の象徴とするまでの様々なレベルにおいての捉え方がなされているだろうことが窺えた。

5、調査2 PAC分析を使用した面接調査

以上の調査において生成した【着用者とゴスロリ】カテゴリーであるが、単語で表現されることが多く調査者にはその意味合いが伝わりにくいものが多かった。そのため内藤（2002）が提案するPAC分析（Analysis of Personal Attitude Construct；個人別態度構造の分析）を使用して、着用者自身の「自分にとってのゴスロリ」を探る試みを行った。PAC分析とは、あるテーマに対して自由連想的にイメージを広げてもらい、連想項目間の類似度評定を調査参加者が行った上でそのデータをクラスター分析にかけ、そのクラスター構造についてのイメージや解釈を調査参加者に語ってもらう事によって参加者にとってのテーマに関する態度やイメージの構造を測定する方法である。単語でしか表現されなかった当該カテゴリーに関するより詳細なイメージが一度図表として目の前に示され共有される事で、参加者と調査者の間でイメージがより共有できるのではないかと、また一度図表にすることで再度、様々な想いを言葉に表しやすいのではないかと考え採用した。

5-1 調査参加者

2011年、所属する大学にて協力者を募った。調査を行ったのは自らをゴスロリと認識する者（かつてゴスロリだったものを含む）3名（女性3名、内、ロリータ2名、ゴシック1名）である。なお調査は全て関西で行った。

5-2 手続き

最初に趣旨を説明し途中で中止しても良い事

を伝えた上で、1時間30分程度のPAC分析を介在させた面接調査を行った。PAC分析際には、それぞれに「あなたにとってのゴスロリ（ロリータ、ゴシック、ゴシック&ロリータ）とはなんですか」とテーマを提示しながら行った。また参加者の類似度評定をクラスター分析にかける際、15～20分程の休憩時間をとった。記録は参加者の目の前で筆者が筆記した。

5-3 結果

PAC分析により得られたカテゴリーに対して参加者が付けたグループ名と、PAC分析全体に対する参加者自身のまとめ、面接中の語りを筆者がまとめたものを調査対象者毎に記述する（得られたカテゴリーは< >で、参加者の語りは「 」で示す）。

A（ロリータ）からは<現実面・客観的に見たら><生き方><外側・型>の3カテゴリーが得られ、Aは自分にとってのロリータを「“かわいい”を中心にファッションで外側を固める、外と内(<生き方>)両方あってこそその服装」だとまとめた。面接からも、自分の「好きなもの」「なりたいもの」である「かわいい」「<生き方>」という理想像を中心として、「自分をロリータとして武装する」という在り方が語られており、理想像というイメージを帯びた服飾で自分を外側からも固め、同時に理想を自らにおいて体現している様が語られた。

B（ロリータ）からは<願望><理想像の内の一部><おしゃれ>の3カテゴリーが得られ、Bは分析結果全体を、「ゴスロリを着る時の感情の一部で、自身の在り方。願望である非日常と理想像の日常、どちらかが欠けると両方無くなる」とまとめた。Bの面接からは、「お人形さんみたい」に「かわいい」という<理想像>のひとつを、「特別な」「非日常」のものだと捉える感覚や、その「かわいい」を「あこが

れ」を持って<ファッション>として使用している様が窺えた。

C（ゴシック&ロリータ/卒業済）からは<現実><理想>の2カテゴリーが得られ、Cはゴシック&ロリータを着ていた自分を「現実に抵抗して、自身や自尊心を保っていた。夢に向かってゆく中で卒業した」とまとめた。Cの面接からは、ゴスロリより提示される「中世ヨーロッパ」「美」「耽美」といったイメージが<理想>像として挙げられ、その像は自分自身が持つものであることが語られたが、同時にゴスロリが服飾である事によって、自分自身の「隠れみの」として機能するとも語り、現実に抵抗するため、自信や自尊心を保つために着用されていた事が語られた。

5-4 考察

三名に共通しているのは、図3において表した様に、提示される服飾のイメージに自身の持つイメージをもって共感しており、それらのイメージを理想像とした上で、その要素を持つ服飾等を組み合わせて身に纏っている事であった。また調査①と同様に、非日常に理想を置き、その理想と現実と距離がある事も窺えた。

加えてこの調査からも、理想であるゴスロリや非日常性を自分自身の一部とみなして取り入れファッションという形で組み合わせて楽しむ者、理想像であるゴスロリと深く関わりあい、それを取り入れると同時に服装や行動、生き方としても体現し、自分の表層をゴスロリで覆い固める者、服装であるという利点を活かして自身を表現すると同時に守る者と、理想や非日常的イメージを着用者がどのように関係を持っているかという点において、それぞれに異なる付き合い方が見られた。特にこの調査で述べられている、服飾で“外側を固める”、服飾を着用する事が“自分の在り方”である、服飾を“隠

れ衰”として用いるなどの表現に関しては、服飾であるからこそその表現であろうが、服飾心理学の概論では理解しきれない部分でもあった。

この調査に関しても協力者数が少ない為、大まかな方向付けでしかないが、イメージに対する取り入れ方がファッションから生き方まで、その深さに差が見られる事、そして服装（表層）でイメージを表している事の二点が重要なポイントではないかと推察される。

6、総合考察

以上、本論ではゴスロリの大まかな定義を述べ、服飾心理学の考え方、臨床心理学からはどのようにゴスロリは理解されているのかをまとめた上で、筆者なりのゴスロリの捉え方を図に表した。加えて面接調査を中心として着用者にゴスロリを語って貰い、その結果を整理し服飾心理学の概念を用いて噛み砕く事で、ゴスロリという服飾とは着用者に対してどのようなものであり、ゴスロリと着用者の間にどのような事が起こりうるかを把握しようと試みた。

その結果ゴスロリとは、現実からは距離のあ

る非日常的なイメージを着用者の理想像とし、服飾という形にして表し、それを自ら着用する事で肯定的感情が着用者に生起すると同時に、自己の持つ好悪体系やイメージの様相に目を向け、自分自身を中心に据えるものではないかと考えられる。また非日常や自分自身に目を向ける事を通して、この世において服を着用する存在である自分という存在や、他者に対しても視線が向かう事も示唆された。またそのようなゴスロリを着用者がどう捉えているかに関しては、着用者によって差が見られるものであった。以上をゴスロリを着用する際に起きている事として以下に表した（図5）。

この着用者間の差に関してはやや強引ではあるが、“ファッション”を身に纏いたい、“自分自身”を表現したい、“守り”たい、“外側を固め”たい、“隠れ衰”をかぶりたいという欲求が、ゴスロリというひとつの服飾が作り出す場（層）に現れているという捉え方をした場合、表1にて引用した Maslow の分類が参考にできるのではないだろうか。“ファッション”や“自分自身”という表現は、尊敬と承認の欲求や自己実現の欲求に分類され、自尊心や自己愛と共に考察す

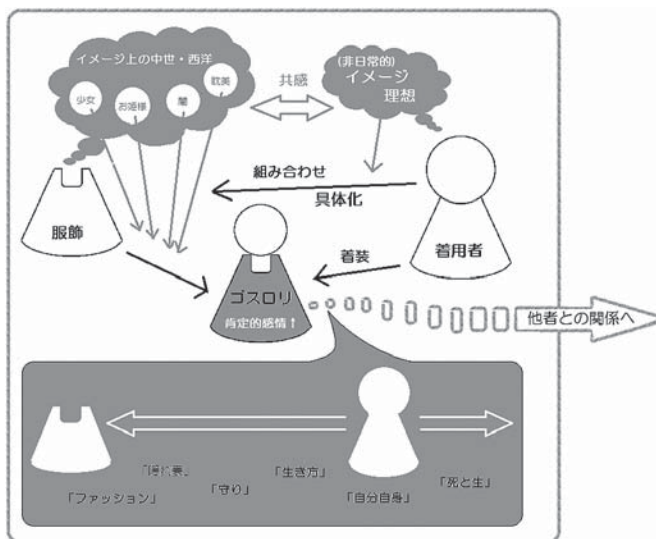


図5 ゴスロリ着用モデルと着用者によるゴスロリの用い方

る事も可能だと捉える事もできる。また“守り”や“外側を固める”、“隠れ蓑”といった表現は、心理的なものとしての安全の欲求に分類されるとも捉えられる。もちろん加藤(2010)の述べるように所属と親和の欲求に分類されるような他者との交流のために用いられている場合もあるであろう。筆者の仮説にすぎないが、自己表現のためや自尊心の満足のためあるいは他者とのコミュニケーションのためといった目的以外にも心的な安全を確保するために服飾を用いる場合があるのではないか、また服飾という自分であって自分でない層(レイヤー)だからこそ、用いる者によって、自分に対して、あるいは他者に対して多彩な表現や試みが可能なのではないだろうか。

7、今後の課題

本論においては調査対象者も少なく、また服飾心理学に関しても概論の範囲でしか述べていない。故に結果や考察においても、ゴスロリの大まかな状態を把握し、その構造についての仮説を立てたに過ぎない。今後もゴスロリ着用者の得ている感覚の機序に対する説明や、他の服飾やそれに類するものとの比較検討を行うため、本論での仮説を元にしたゴスロリ着用者に対する更なる調査、及び服飾心理学に関する更なる研究、また他の服飾や化粧等に関する更なる調査研究が必要であるだろう。

<付記>

本論文は2009年度に提出した京都文教大学臨床心理学部卒業論文、2011年度に提出した京都文教大学大学院臨床心理学研究科博士前期課程修士論文、日本心理臨床学会第32回における発表より抜粋し、加筆・修正を加えたものである。

文献

- 秋田巖.(2001). 奇妙な身なりのクライアントたち—
Disfigured Hero 臨床編. 臨床心理研究 京都文教
大学心理臨床センター紀要, 3, pp.37-39.
- Endo, Y.(2009). The Multiplied Gaze in
Shimotsuma Monogatari : Un/Dressing the
Lolita Fashion. 大阪学院大学 人文自然論叢, 58,
pp.1-16.
- 藤原康晴.(1987). 女子大生の好きな被服のイメージ
と自己概念との関連性. 日本家政学会誌, 38 (7),
p.593.
- 藤原康晴 ほか.(1996). 服装に対する評価とその服装
によって生起する多面的感情状態との関係; 派
手/地味あるいはフォーマル/カジュアルと評
価される服装の場合. 繊維機械学会誌, 49 (8),
pp.47-54.
- 藤原康晴.(2005). 服飾の心理的作用. 藤原康晴, 伊藤
紀之, 中川早苗 ほか, 服飾と心理 pp.1-9. 日本放
送出版協会.
- 加藤訓仁子.(2010). 世代別「ロリータファッション」
考察. 繊維学会誌, 66 (7), pp.219-222.
- 香山リカ.(2004). 「こころの時代」解体新書 大阪ゴス
ロリ事件の心理的背景. 創, pp.86-89.
- 小林茂雄.(2003). 装いの心理 服飾心理学へのプロム
ナード改訂版. アイ・ケイコーポレーション
- まえがわまさな.(2008). 日本におけるゴシック、ロ
リータ、ゴシック&ロリータ文化概説——附 日
本におけるゴシック、ロリータ、ゴシック&ロ
リータ関係文献目録. 年報『少女』文化研究, 3,
pp.127-147.
- 水野麗.(2009). 宝塚・コスプレ・ゴスロリ —「夢の
世界」との距離 宝塚という装置, pp. 280-306. 青
弓社.
- 内藤哲雄.(2002). PAC 分析実施法入門: 「個」を科学
する新技法への招待 改訂版. ナカニシヤ出版.
- 中川早苗.(2005). 服飾の着装と心理. 藤原康晴, 伊藤
紀之, 中川早苗ほか, 服飾と心理 pp. 53-66. 日本
放送出版協会.
- 西村則昭.(2003). アニマ・ムンディとしてのモード
—魂の現象学の試み. 人間学研究, 2, pp. 21-31.
- 西村則昭.(2005). 「ゴシック」な世界観と「乙女」の
アイデンティティ: あるストリート・ファッション
をめぐる魂の現象学の試み. 仁愛大学研究紀
要, 3, pp. 23-37.
- 西村則昭.(2006). Ⅲ節 ゴシック&ロリータ. 現代社

- 会と臨床心理学 pp. 36–40. 金剛出版.
- 西村則昭.(2009). パンク・ゴシック・ロリータの心理. 心理臨床の広場, 1 (2), pp. 36–37.
- 高石浩一.(2009). ファッションと自己愛. 心理臨床の広場, 1 (2), pp. 34–35.
- 嶽本野ばら.(2001). カフェー小品集. 青山出版社.
- 嶽本野ばら.(2002). パッチワーク. 扶桑社.
- 徳山朋恵.(2010). ゴシック&ロリータの精神性 一文献とインタビューより. 京都文教大学臨床心理学科卒業論文 (未刊行)
- 徳山朋恵.(2012). ゴスロリ着用者に見られる「まもり」の感覚に関する試論的考察. 京都文教大学大学院臨床心理学研究科修士論文 (未刊行)
- 徳山朋恵.(2013). 特定の服飾が個人に対して与える影響に関して—ゴスロリという服装を通して. 日本心理臨床学会 第32回大会 論文集 p. 613.
- 八幡洋.(2004). ネオ・マゾヒズムに走る若者たち リストカット・ゴスロリ・ムック. 世界, pp. 173–181.

Abstract

The Clinical Psychological Possibility of Gothloli

Tomoe TOKUYAMA

Gothloli have been reported in many fields. However, it leads to be reported sporadically due to diversified standpoints. The purpose of this paper is to understand what kind of phenomenon is happened and how this is happened, and how one feel when one wear Gothloli from the clinical psychological standpoint.

First, I classified Gothloli into 3 groups: Gothic, Lolita, and Gothic&Lolita. I summed up the study about these groups and the scheme of these things. After that, I defined the meanings of Gothic, Lolita, and Gothic & Lolita in this paper. Gothic is the deviation from society and dark view of world, and intention of transcendent material. Lolita is awareness and affirming their own dream, ideal, an unreal longing world leading to the prettiness or the girlness whatever one wear. Gothic&Lolita is combining both meanings.

Second, I summed up the study of clothing psychology. Especially, the 3 points are shown in this paper: that wear relates to many kind of desire according to Maslow's desiring levels, that wearer decides to wear the clothes by unreal and real body scheme and self-concept, and that wear express positive or negative feelings and a sense of shame. I found that in the clinical psychological study of Gothloli, a certain paper mentioned Gothloli relates to stabbing incident in 2003, another paper said with standpoint of narcissism and phenomenology, although there are only a few studies.

I interviewed 6 people and revealed that relationship between wearer and Gothloli by classifying the pattern of interview result with KJ method. In addition, I found that the difference how one think about Gothloli for wearer by the PAC analysis for 3 people.

Here, I approached the mechanism model how one feel when wearing Gothloli. However, the problem of low number of subject person is still remained. Hereafter, It might be needed the additional research with more interview result, related clothing psychological research, and psychological research of cloth except for Gothloli or makeup.

Key words : gothloi (ゴスロリ), cloth psychology (服飾心理学), interview research (面接調査)